

自然体験活動における環境教育の浸透過程に関する研究

学校教育専攻 環境教育専修 1012713

佐藤 眞史

1. はじめに

近年の自然体験活動では、「自然の中での活動（自然体験活動）＝環境教育」と位置づける例が多く見られ、手段の目的化、手段と目的の同一視が生じているととらえられる。このことは、環境教育の観点やあり方が不明確であることに起因すると考える。本研究では、この課題を歴史的に解明しようとした。環境教育の観点が浸透した時代にさかのぼり、活動現場、実践者の意識への浸透過程と内容を明らかにし、観点やあり方を考察した。具体的には、次の2点を明らかにした。

- ①自然体験活動関係者の記述に基づく、自然体験活動現場への環境教育の浸透
- ②自然体験活動実践者への聞き取り調査による、実践者の意識への浸透

2. 自然体験活動現場への浸透過程

野外活動は戦前から青少年教育のツールとして取り扱われ、自然は利用するものであって、活動のフィールドでしかなかった。1970年以前には、自然保護や環境教育の観点の浸透は見られず、浸透以前の時期と位置付けられる。1970年代に入ると、自然保護の観点の浸透が見られ、浸透萌芽期と位置付けられる。1980年代に入ると、環境教育の観点が浸透し始め、浸透初期と位置付けられる。

そして、1987～1991年に行われた清里環境教育フォーラムを契機として、自然体験型環境教育という形で自然体験活動に環境教育が浸透し、環境教育の1分野に位置づけられた。まさしく、浸透後期と位置付けられる時期であった。活動現場への浸透過程とその内容について整理すると図1のようになる。

3. 実践者の意識への環境教育の浸透過程

1980年代から現在に至るまで、自然体験活動に関する指導者4人に聞き取り調査を実施した。結果は浸透初期、後期の状況を裏付けるものであった。

4. まとめと考察

記述、聞き取りを分析した結果、環境教育の浸透は1970年代に萌芽が見られ、1980年代から本格的に浸透し始め、1990年代にはほぼ浸透し終えたことを明らかにした。浸透過程の分析から、自然体験活動における環境教育の観点として、①自然に触れることから環境全体を考えると、②人間と自然の関係を学ぶこと、③価値観の変容につなげようとする、の3点を挙げるができる。また、環境教育の最終ゴールを意識して活動することが重要である。

浸透以前 70年まで	<ul style="list-style-type: none"> ・野外活動は青少年教育のツールで、自然は活動場所でしかなく、自然に触れる活動はなかった。
浸透萌芽期 70年代	<ul style="list-style-type: none"> ・自然に目が向けられ、自然は守るべきものという意識が芽生え、自然保護の観点が浸透し始めた。 ・意識変化の必要性は唱えられていたが、現場に具体的な形で広まるには至らず、活動スタイルは従来のものであった。
浸透初期 80年代	<ul style="list-style-type: none"> ・自然保護の観点が広まりを見せ、活動現場まで広まった。 ・自然との関係の学習や価値観の変容を求めるといった観点が浸透する。しかし、自然保護の観点と、新たに見られ始めた環境教育の観点とが混在していた。
浸透後期 90年代	<ul style="list-style-type: none"> ・自然体験型環境教育という言葉とともに、環境教育活動が広まり、環境教育に貢献できる方法が考案され、実践者の間に広く環境教育の観点が浸透し、広まりを見せた。

図1 自然体験活動に環境教育の観点が浸透する過程